



TITLE:

日本經濟史研究の必要と困難 (特別號)

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 日本經濟史研究の必要と困難 (特別號). 經濟論叢 1921, 12(1): 115-126

ISSUE DATE:

1921-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127738>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第一號

第二卷

論說

地租に於ける特別税對附加税……………法學博士 神戸 正雄

歴史の本領……………法學博士 財部 靜治

ヘンリー・ジョージの土地國有論……………法學博士 河田 嗣郎

獨逸税制の發達を論ず……………法學博士 小川 郷太郎

時論

米價安定と常平倉……………法學博士 戸田 海市

說苑

日本經濟史研究の必要と困難……………法學士 本庄 榮治郎

世界貿易概觀……………法學士 小島 昌太郎

京都市小學校教員生計調査……………法學士 汐見 三郎

正常需要供給の動的考察と時の要素……………法學士 石川 興二

特 別 號

説苑

日本經濟史研究の必要と困難

本庄榮治郎

一 經濟史研究の重要

我々は現在を知ると共に、また過去を知るの必要がある。過去を知るは、即ち歴史を知るの謂に外ならぬ。昔の狀態を知ることば、それ自身に於て、興味のある事柄である。例へば旅行者が來し方を振り返つて見る時、其處に無限の興味を感ずると同様である、勿論過去を回想することは既に經過せる道程に逆戻りをする爲めではない。即ち現在を昔ながらの狀態に引き戻す爲めではない。我々は寧ろ過去の經驗によつて、將來進むべき道を、何處に求むべきかの參考に供せむとすることが少くない。歴史は過去に屬する經驗の記錄であるが、それによつてたゞ過去を知ることのみならず、現在を理會し、更に將來の指針として參考し得べきものである。經濟史の研究は、過去の經濟事情を知るためのみならず、それによつて現在の經濟事情を知るべき料となり、また將來の政策を確立するためにも重要なものである。——このことは既に前號の本誌に於て略論したから茲に再説するの必要はない。

二 日本經濟史研究の草創時代

前號の本誌にも述べた如く、我が學界には未だ一の纏つた日本經濟史も存在してゐない。横井時冬博士の日本商業史維新後の商業史、日本工業史はその論述の範圍、必ずしも工業商業に限らず、廣く他の方面にも及んで居り、又これが研究には文書記録等に據るの外、親しく各地に出張して當事者に就いて質されたものであつて、多大の勞苦を惜まれなかつたものであるが、然し經濟史として一の纏つたものとはいふことは出來ぬ。内田博士は嘗て東京專門學校(今の早稲田大學)の講義録に「經濟史」と題するものを掲げられ、上古から江戸時代まで、事項によつては明治時代のことをも附記して日本經濟史の大略を説述せられたが(紙數一)これを以て日本經濟史の完全なる一著述と見做すことは如何であらうか。又、福田博士原著、坂西學士譯の日本經濟史論もよく要領を得且啓發さるゝ所の多きものであるが、博士が、根本史料等を參酌するの機會に乏しき、海外に於て、著はされたものであつて、間然する處なきものとは限らないやうである。前號に紹介せし竹越氏の日本經濟史も、尨大なる著述であり、斯界の寂寞を破るに足るものではあるが、純然たる經濟史ではなく、歴史の經濟的説明に外ならぬものである。其他種々の著述があるが、未だ一貫したる日本經濟史としての代表的著作は、遺憾ながら見出すことは出來ない。

三 日本經濟史研究の興味

明治維新の後、西洋の文明を吸收するに急なりし我が國民は、却て自己自らを研究するの邊なく、遂に今日に及んだ次第であるが、自己に關係のあることは特別な興味を感ずるのが常であるから、日本の經濟史に就ても、日本人が特に興味を有するものなることは論する迄もない。内田博士も言つておらるゝ如く、「^{*}自分に近い所のもの、自分に關係ある事柄には、特別な興味がある。同じことであるならば、懸隔した縁もゆかりもない場合よりは、自分に近い親密な場合が一層興味が高い」自分の故郷に關する事柄などは、それが些細なことであつても、多くの興味を惹くものであるから、我々の祖先が如何なる有様の生活をなし、我國が昔から如何なる經濟上の變遷を経て來たか、また經濟に關する先賢の著述には如何なるものがあるか、之に依つて當時の經濟事情や老人の苦心を知り、また名相賢臣の行つた經濟政策などを知ることが、如何に興味の多きことであらう。我々が外國の經濟の發達を研究して、その興廢の跡を究めた時に生ずる興味と、我國自身の經濟の發達を知り得たる時の興味とは著しき差異があると思ふ。

四 日本經濟史研究の便宜

かくの如く日本の經濟史は我々日本人にとつて興味があるばかりではなく、又研究上にも種々の便宜がある。日本に居つて、西洋のこと、殊に歴史的の研究に従事する場合に、根本史料を手に入れることは決して容易のことではなく、特別な研究をなすに頗る不便なる地位にあることは、いふまでもない所であらう。然るに日本のことを研究する場合には、右の場合に比して、史料の

蒐集も頗る容易であり、且之を判斷する上に於ても、我々が西洋の事情に不案内であるがため、西洋の書物を讀んで判斷を下すに當つて往々生ずる「誤解」に陥る如き弊が少ない。黑板博士はその著國史の研究に於て「我が國史は我々の祖先以來代々やつて來たことである以上、その血液を受け繼いで居る我々日本人が、國史上の出來事に對して最も肯綮なる判斷を下し得ない理由はあるまい」と言つて居らるゝが、このことは移して以て我國經濟史の研究に就ても立言し得る所である。かくて邦人の日本經濟史研究は、一言にして盡せば、行届いて行ふことが出来る。かくの如き便宜は獨り自國人のみが有する處であると言つても差支あるまい。

五 日本經濟史研究の義務

日本の經濟史は日本人にとつて、以上の如き興味があり、且つ便宜があるばかりではなく、我々自らの立場から考へても、外國の事の調査よりも、先づ自國のこの研究に主力を注ぐべき義務があると思ふ。人間の力には限りのあるものであるから、一人で以て、總ての國の經濟の發達を詳細に研究し盡すといふことは到底不可能のことである。既に歐米の學者は歐米に於ける經濟の發達を能く研究して居るが、それに比すれば、東洋のことは、彼等と雖、猶調査研究の行届いてゐない所が少くないように考へられる。我々は東洋に國を成してをる關係上、日本或は稍廣く東洋のことを十分に研究し、西洋のことは、西洋の學者が最も確實に研究せし結果を利用し、以て比較研究を大成せなければならぬ。然るにたゞ西洋のことばかりを、而も第二次的史料たるに過

* 總説の部、308頁

** 内田博士、日本經濟史研究の材料に就きて(國家學會雜誌第二十三卷919頁)

ぎぬ編纂物で知つておつて、自國自身のことを知らぬといふが如きことが、若しありとすれば、それは所謂燈臺下暗しの譬の通りであつて主客顛倒の事柄ではあるまいか。かくて日本自身のことを却つて西洋人に教へて貰つたり、或は日本に既に存在しておつて長く經驗されておることを、未だ日本に存在せなかつたかの如くに考へて、西洋の事例を直輸入して、失敗したりする例もあるかも知れぬ。我々は昔から我國に存在してゐる制度慣行等を正しく理會して、之を現在の事情に照して實行するの必要がある。我國將來の經濟政策を確立する上に於ても亦然りであらう。

六 特殊研究と比較研究との先後

我々は以上の如き興味と便宜と義務とからして、日本經濟史の研究は日本人自らが行ふべきものであることを主張した次第であるが、之は決して學問上の鎖國主義を唱ふる所以ではない。日本の事情が明らかになるといふことは、何人が研究したにしても結構なことであるから、外國人が研究する場合にも、我々は彼等に出来るだけの便宜を計つて、その研究を大成せしむべきものである。外人の日本研究は既に可成り盛んに行はれ、我國に關する著述も決して少くないことは、ウエンクステルン氏の「大日本書史」や黑板博士の「國史の研究」に掲げられてゐる「國史に關する洋書目録」(總説の部) (二〇〇頁)などを一瞥するも明らかである。又「日本亞細亞協會報告」や「獨逸東亞學會報告」等には歐米人の日本經濟史に關する研究も少からず發表されてゐる。それ等の論文の中には、當時の我國の學者があまり注意を拂はなかつた事柄を詳細に研究したのもあり、或はその論述

* 内田博士、前掲國家學會雜誌二十八卷487頁

** Wenckstern, Bibliography of the Japanese Empire.

*** Transactions of the Asiatic Society of Japan.

**** Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens.

の方法が、當時我國の學者によつて行はれたような非秩序的のものでなく、頗る科學的組織的方法によつて明晰に記述されたものも少くない。これ等は何れも他山の石、以て玉を攻く可きものであらう。またこれと同時に我々も西洋の社會、西洋の歴史も、通りは研究して、日本のことを調査する場合の参考とせなければならぬ。日本と西洋とは、維新前に於ては、常に必すしも直接の關係があつたものとはいへぬ。然るにも拘はらず、經濟發達の大勢に至つては彼此相類する所が少くない。人類經濟生活の基本的な潮流は、比較研究によつて闡明さるゝに至るものであるから、學問上には繩張りを定むることなく、彼我共に廣く研究すべきものである。然しこの比較研究を行ふには、先づ以て一國の經濟史に通曉するの必要がある。特殊研究が比較研究に先き立つべきものなることは既にカンニンガム氏もこれを説いてゐる。即ち我々は先づ以て日本經濟史に主力を注ぎ、或は東洋經濟史の研究に力を盡し、傍ら西洋經濟史を參考するの必要があらう。それと同時に外人の日本研究も大に歡迎すべきものであらう。

七 自己研究の風潮

日本のことを日本人で研究するといふ風潮は、近頃大に興りつゝあるやうである。日進月歩の有様である我國の現今の醫學は殆んど西洋の學問に負ふ所であらう。然し一方には我國の醫學者中にも、日本の古い醫書に大なる興味を有してその變遷來歴を研究した人もある。富士川游博士の日本醫學史(明治三十七年十月刊行)の如きはその尤たるものであらう。數學も今日の算術とか代數とか幾何と

* Cunningham, The Teaching of Economic History. (Essays on the Teaching of History. p. 47.)

かの六かしい名前のは、西洋からの輸入であるが、昔にも和算の方法によつて種々の複雑なる計算が行はれたものである。この和算の歴史の如きもまた精しく研究せられてゐる。遠藤利貞氏の大日本數學史（明治三十九年十一月刊）（大正七年九月増訂刊行）はそれである。その他探鑛冶金の専門家の中にも、日本の昔のことを調べておらるゝ人があるといふことである。^{*}尤、大日本貨幣史などを見ても、昔の探鑛の方法などが木版畫でよく記載してあるのに氣が付く。これ等の醫術・數學・探鑛冶金等の方法は今日のものは殊に懸け離れた方法によつたものであつて、その沿革を調査しても直接今日に役に立つ處は極めて少いといつても差支なき程のものであらうけれども、猶かくの如く歴史的研究の必要は認められて來て居るのである。況や過去よりの國民生活の狀況を研究する經濟史に於てはその必要の大なることは、論する迄もない所であつて、近頃この方面の研究の次第に進まんとする傾のあることは大に慶賀すべきことといはざるを得ぬ。

八 研究の困難

さて日本經濟史の研究が大に必要であるとして、然らばその研究は容易であるかといふに、決してそうではない。瀧本博士はこれについて五個の理由を擧げておらるゝ。^{**}「先づ第一には政治經濟上の事は、封建時代に於ては、一切之を秘密にして猥りに之を世上に漏洩することを許さぬ。洵に取るに足らざる儀式上の事、若くは教訓に關する事、將た又武家武人の功名談等の外は、何でも彼でも總て秘密の中に埋沒せられ、他人には決して知らすまじ、外間には斷じて洩らすまじ

^{*} 内田博士、前掲國家學會雜誌第二十八卷488頁

^{**} 經濟史の研究に就て（經濟一家言402頁以下）

と腐心したる結果、重要な書類の多くは、燒棄若くは破毀して子孫に傳へしめず(是れ一難)其の稀れに存するものは、舊家富豪の庫中に埋藏せられて世上に出づるの機會なく(是れ二難)、又偶々舊官衙若くは舊問屋などに保存しありたる記録類には、甚だ重要なものありて、夫れ等の中には現に公私の圖書館に備へ置かれて一般の披閱に便せらるゝものなきにあらざるも、これとて多くは専門學者の手を経て完全に整備せられたるものにあらざれば一々之を點檢して所用の資料を搜索するは中々容易の事業にあらず(是れ三難)、加之ならず所謂古文書は勿論のこと、近くは維新前後の廢文書なども大抵無學なる俗人の手に成りたるもの多く出鱈目の文字を使用し難解の文法を以て記録しあれば之を一閱して其の意を解すること甚だ難し(是れ四難)、又經濟上に最も重大の關係を有する數字に關しては昔の人々は頗ぶる吞氣にして、例へば一が二となり、四が五となり、甚しきは位が違つて居つても尙ほ一向平氣で少しも構はなかつたものである。故に同一事件に關し二種の書類が其の數字に於て一致して居ると云ふが如きは殆んど稀有である(是れ五難)と云ふも過言にあらざるのである。されば今此等の困難を排除して、忍耐に研究を事とするは非常の精力家に於てすら容易に爲し難き事にして、之が爲めには數日數個月の辛苦を徒勞に歸せしむるか如き場合も少からるのである。殊に不幸なることには、我が學界には未だ日本經濟史の名稱に値ひする經濟史は一も存するなくして、其の研究に従事するものは、範を先例に取るの便もなければ、獨自ら茫渺たる大海に進航して當途もなく寶の島を探檢するに異ならざるのである」云々。

九 右の五難説に就て

これ等の批難は何れも一應尤な所である。然し(一)ものは見方によつて如何様にも解釋し得る。またものには表裏の二面がある。楯の半面を見ておつては、楯の眞義を知ることが出来ぬ。須く他の半面をも考察するの必要があらう。(二)加之、學問研究の草創時代に當つては、成るべく多數の人々の研究を慫慂し刺激する必要があり、従て研究を試みんとする人々の意思を挫折せしむるが如きは策の得たるものではない。研究の困難を高調するよりは益々生ひ伸びむとする芽を保護して生長せしむべきであらう。自分はこの二點からして右の五難説について考ふる所を述へて見たい。

先づ第一に重要な書類が存在しないといふ點であるが、勿論既に散逸した書類は頗る多いのであるが、今に至つて存在してゐるものも決して少くはない。史料の多く存在してゐるのはやはり近世の時代即ち徳川時代の場合であるが、この時代の重要書類としては、現在東京の帝國圖書館や内閣文庫、東京帝國大學に收載せられて居るものが少くない。帝國圖書館の徳川幕府書籍目録(京都帝國大學經濟學部研究室及び文學部國史研究室所藏の舊幕府引繼書目はこれと大同小異なり)を見れば大體を知ることが出来る。又、經濟書としては、日本經濟叢書に收容せられてゐる多くの書物がある。其他大藏省農商務省などで大日本貨幣史・大日本租稅志・舊幕府理財會要・大日本農史・大日本農政類編や、又は大日本通商史などが編纂せられたときに、その材料として幾多の資料が蒐集せられ、整理せられて存在して居るものも尠くない

修史館以來、今日の東京帝國大學文學部史料編纂係に至るまで、史料編纂事業の進行に伴ひ、蒐集せられた經濟財政史に關係ある資料は頗る多く、且、貴重なるものに富んでゐる。^{*}其他徳川禁令考や吹塵錄、竹橋餘筆、誠齋雜記等もある。これ等の類を擧ぐれば限りのないことであるが、要するに重要な書類の今に残存せるものも必ずしも少くはないのである。世間一般の人は、古き書類や書籍を多く蒐集することは中々容易の業ではなく、且、特に之を探索する餘裕がない爲め、資料の乏しきことを速斷するらしいが、既に瀧本博士の日本經濟叢書を一見すれば、經濟史上資料たるべきもの、少からず存在することが知れやう。又これに志して探求すれば、今後も尙、資料は發見さるべきものであらう。

第二に、舊家富豪の庫中に埋藏されて世に出づる機會がないといふことも、一應尤な所ではあるが、他面より考ふれば、既に日本經濟叢書が出版せられ、又國書刊行會などで稀觀の書類を出版することも行はれおり、古書類苑の如きも完成したのみならず、各藩各地又は富豪名家等の修史事業も次第に盛んに行はれつゝあるから、貴重な資料が追々世に出づることであらうと考へられる。

第三に、資料が整理されて居ないといふ點であるが、明治の前半には官選の著書によつて資料の整理されたものもあり、(例へば大日本農政類編の如き、大日本貨幣史參考の如き)、前述の古書類苑の如きも、資料を整理編纂したものに外ならぬ。且各方面の修史事業の進むに伴れて資料が追々整理されて來ることは明かである。然し極端に言へば、資料を整理すること、それ自身が

* 内田博士、前掲國家學會雜誌、第二十八卷89頁

研究者の一の重大なる任務ではなからうか、既に整理された材料のみによつて、經濟史を編み立てるといふことは、今日の狀態では勿論不可能であるが、資料整理の勞力を要することは、經濟史のみならず、何れの學問に於ても、當然研究者の覺悟すべき所であらう。

第四に資料に難解のものが多いといふ點であるが、これは尤なことであるが、どうも致方のないことである。資料を自己に適當なやうに造るといふことは出來ぬことであるから、存在してゐるまゝの資料によつて研究するの外はない。出鱈目の文字などが使用されてゐるのは事實であるが、それも、そういう書類に馴れば、自ら判つて來るものであつて、これがために經濟史の研究を斷念するには當らぬ。又書いてある事柄が頗る雜駁であつて、經濟書として考へられて居るものゝ中にも、今日の經濟學に當て簞らないものが甚だ多い。これは、昔と今とで經濟の意味が違ふことより生じたる所であつて、政治上學問上技術上道德上の事柄までも經濟として考へておつたものである。然しその中から選擇すれば經濟事情に關する材料は少からず得られるのであるから、材料が雜駁なればとて之を棄つるには及ばぬ。のみならず、かゝる選擇の必要は、必ずしも經濟史ばかりに限つたわけではなく、他の方面の研究に於ても往々生ずる所のものであるから、これまた研究者には當然覺悟すべき所の過程であらう。

第五に數字の觀念についてであるが、これも通常世人が考へて居るよりも、割合に多くの材料を存するようである。例へば吹塵錄とか、竹橋餘筆とかはその一例である。勿論數字の吻合せない場合は甚だ少くないが、それは研究者の慎重なる判斷によつて、何れが正當なるべきかを定む

るの外はない。

要するに日本經濟史の研究が頗る困難なる事業であることは勿論であるが、然し今日では種々の史料文書が出版されたり、或はその所在の明かとなつたものもあり、又、事業類書の類が編纂されて居り、或は既に研究せられて一の成書が公にせられたものもあり、或は未だ出版せられずと雖、修史事業の進みつゝあるものもあつて、昔時に比較すれば、その研究は餘程容易となつた次第であるから、多少の勞苦は、もとより覺悟の上下進んで研究を致さなければならぬ。それにしても一般世人が經濟史研究の必要を認めて材料を提供し便宜を與ふことを辭せざるまでに到らなければならぬと思ふ。

十 結 辭

日本人は日本を知らなければならぬ。日本經濟史の研究が必要であることは、最早議論の餘地なき所である、歴史を以て政治・外交・戰爭の歴史であり、偉人の傳記であるを考へるのは、時代錯誤の思想であらう。時代は須らく國民生活の事實を物語る歴史を要求して居る。日本經濟史の研究は方に將來ある學問である。勿論その研究の前面には多大の困難が横はつて居る。然しこの困難は必ずしも獨り日本經濟史の研究のみに存するものではない。然るにこの困難に僻易するやうでは、何れの學問に於ても、研究を成すの資格はないものといはなければならぬ。而して從來この方面の研究が開却されて居つただけ、それだけ、今後開拓の犁鋤を進むべき餘地は甚だ多く存在し、何等かの成果を擧ぐべき先蹤なき處女地は到る處に見出すことが出来る次第である。